

市販の魚は心配ない

水俣の奇病 関係者が強調

奇病発生ノイローゼ気味の水俣市内では最近魚の売行きが目立つて減り、水俣漁協が取扱う魚介類は禁止区域外でとれた安全なものまで取引を敬遠されるなどの悲劇を引き起している。このため同漁協では生活補償の問題と漁業対策委員会を設け、きょう二十五日午後一時から水俣保健所で第二回の会合をもち、県、水俣市、新日鐵など関係者を招いて生活補償問題を話し合うと波紋を描いているが、つぎに漁業問題を中心に現地の実情を関係者にきいてみた。

◇水俣保健所長伊藤嘉郎氏の話

奇病の原因は軍倉庫の中毒とみられ、その媒介体として水俣湾

(マダガス)でとれる魚介類が

あげられている。しかし漁協で

は奇病と関係があると思われる

地区からの魚介類は一切あつか

っていない。漁業者自身も湾内

での操業をやめているので現在

市中に出回っている魚は全部外

海ものだから食べても全く心配

はない。湯之川温泉の魚も全然

関係ない。

◇新日鐵水俣工場付岡岡院長細川一氏 水揚げ地が水俣というだけで魚全体が恐ろかられなくなり湯之川温泉まで敬遠されているようなものではないか。熊大ではらく食べないというものはマダガタの魚だけを指したもので、私はいまでもあじを食入っている。

◇水俣漁協主事今野嘉郎氏 漁業権を設定している水俣沿岸での水揚げ高は例年十二万貫内外、金額にして四千七百万円程度だったが、奇病発生後は激減し三千年度にはわずか三万六千貫となった。昨年度に入るや事実上ゼロになつており、組合としても死活問題なので原因の究明はもちろんだ。その前に何と社会保険の道を試みて欲しいと思う。